

「人間は動物とどこがちがいますか？」動物学をやっているせい、ぼくはしばしばこう聞かれる。人間というのは、なぜかすごく偉いことになっている。ぼくらは暗黙のうちに「人間は動物とはちがう」と思っているのだろう。たしかに人間とほかの動物とはちがう。でも、それはネコがほかの動物とちがうのと同じことだ。ネコがイヌとちがうからといって、ネコがイヌより偉いことにはならない。えさを食べて、育って、子孫を残す。ほかの動物たちとまったく同じである。ただ、生き方のパターンがちがうだけだとぼくは思う。

地球上にはいろいろの動物がいるけれど、その生きかたは、じつにさまざまである。昆虫には昆虫の生きかたがあるし、魚には魚の生きかたがある。クラゲという動物は口はあるが肛門はない。それでもちっとも不便していない。それがクラゲの生きかたである。アメーバやゾウリムシといった単細胞の生物は、ある意味すごく便利にできている。ただじつとしていてだけで、酸素が入ってくる。息をしなくてもいいのだから、こんな便利なことはない。

動物たちのそれぞれの生きかたを、その動物の「文化」と呼ぶことはできないだろうか、ぼくは考えた。クラゲの文化とか単細胞の文化とか、カバ文化、ライオン文化、昆虫文化といったぐあいである。そう考えれば、人間の文化も何かをつくるというような話ではなく、人間はどう生きているかという話になってくる。

では、人間はどういう生きかたをしている動物なのだろうか。いちばん大きな特徴は、人間は自然に手を加え、自然を変えて生きる動物だということだ。あえていうならば、自然を支配して生きていくことである。食べものを生産し、家を建て、冷暖房を入れて……。ぼくらはそうやって生きている。そんなことをしている動物はほかにはいない。

そんなことができるのは、人間の脳がすごく発達しているからである。おかげで論理的に考えられるようになった。現実には見えないことも、ぼくらは「こういうことではないか」と考え、その上に論理を組み立てることができる。

ただし、いいことばかりではない。人間は「死」というものを知ってしまった。自分もいずれ死ぬことがわかってしまった。これはショックだった。ほかの動物は自分が死ぬなんてたぶん考えていない。人間だけが死というものを知ってしまった。ものすごく悩んでいる。それに対抗するために、宗教をつくつたし、死後の世界があるはずだと考えた。あるはずがないものをそこまでつくり上げるのだから、人間とはすごいものである。逆にいえば、人間だけがそんなことで苦しんでいるのである。

人間は自然界のさまざまな法則性に興味を持ち、一生懸命それを知ろうとしてきた。知ることができたら、今度はそれを使って何かをしたい、何かをつくりたいと思う。こうして科学や技術が進歩してきたのだが、だからといって人間が偉いというわけではないだろう。それはただ、人間という動物の生きかたのパターンにすぎないのだとぼくは思う。

「人間の文化は優れている」とか「人間は動物とはちがう」と考えるのではなくて、動物たちはそれぞれちがうパターンで生きていることを、ぼくらはまず知る必要がある。イヌを抱っこしてかわいがっているつもりでも、イヌのほうは抱っこされたくないかもしれない。その動物がどういうパターンの動物なのかを知ることが大事なのである。

人間は自然を支配して生きていくようになった。けれどそのために、たくさん深刻な問題もつくり出してきた。動物たちのそれぞれの生きかたを知ること、ぼくら人間自身の生きかたも見えてくるのではないだろうか。

日高敏隆『ぼくの世界博物誌 人間の文化・動物たちの文化』(二〇〇六・一一 玉川大学出版部)

「人間の文化、動物たちの文化」 人間は偉くない 人間はどういう動物か？

Ⓚ 令和八年度 久留米大学附設中学校入学試験問題

国語科

注意 1 解答はすべて解答用紙に記入せよ。解答用紙だけを提出すること。

2 ㉑から㉒の設問で、字数を指定している場合は、句読点などを含んだ字数である。

㉑ 問題は解答用紙(全2の1)にある。

㉒ 次の問いに答えよ。

問一 「想」という漢字について、後の問いに答えよ。

(1) 「想」は「相」と「心」を組み合わせた漢字であるが、さらに「相」の部分は「木」と「目」を組み合わせた漢字である。このように、漢字三文字で一文字になる漢字を、以下の漢字を組み合わせて二つ答えよ。ただし、同じ漢字は二度用いてはいけない。

言 角 牛 日 月 木 亡 王 刀 車

(2) 次の①～⑤の空欄を、後に続く意味を参考にそれぞれ漢字一字で埋めよ。

- ① 「」想…現実にはありそうもないことを思い描くこと。
- ② 「」想…考えつくこと。思いつき。
- ③ 「」想…それが最もよいと考えられる目標。
- ④ 「」想…あることからそれにつながる他のことを思い浮かべること。
- ⑤ 「」想…ある物事を行うにあたって、全体の内容や方法を考え組み立てること。

問二 次の①～④の傍線部をそれぞれひらがな四字の繰り返し言葉で言い換えよ。

例 偶然駅のホームで彼と出会った ↓ 答え「たまたま」

- ① よりいつそう勉強に励もうと決心した。
- ② 念には念を入れて考えると、彼の言葉にも一理ある。
- ③ 他のついでではなく、そのために遠いところから来てくれてありがとう。
- ④ 待ちに待ってついに本日が新製品の発売日となります。

問三 次の①～③について、傍線部の言葉の使い方が間違っているものをア～オからそれぞれ一つずつ選び、記号で答えよ。

- ① ア 彼がオークションに出品した品物が、高値で購入されました。
- イ 心配性な僕は、試験に向け万全の対策が行われた。
- ウ 彼女の積年の悩みは、友人のアドバイスですっかり解決された。
- エ 私が書いたレポートが、「すばらしい出来だ」とほめられています。

オ チーム内で連絡を密にとっていたお陰で、問題点がすぐに共有された。

② ア 社長みずから会議にいらっしゃいました。

イ 私は熱心に先生の言葉をお聞きになった。

ウ 私の論文について、先生の意見を伺いました。

エ 今日は遠方からお客様がお越しになります。

オ その改善点は、あなたが先生におっしゃってください。

③ ア 大差で負けていたとしても、最後まで戦うことが大切だ。

イ まさかそんな日がくるなんて思いもよらなかった。

ウ まるで大きな犬のような雲が、青い空に浮かんでいる。

エ もしも私が鳥になったら、自由に空を飛びたい。

オ とても長い議論のせいで、彼の提案はようやく可決される。

㉑ 次の文章を読んで、後の問いに答えよ。

吾郎の妻、美恵は、娘の春美が一流のピアニストになることを夢見ていたが、病で亡くなってしまふ。吾郎は、春美を一人で育てることを決意し、二人で暮らしてきた。

十一月も終わりに近づいた日曜の朝だった。眼を覚ますと十時を過ぎていた。慌てて階下に下りると、春美がお腹を空かせて待っていた。食卓の上には朝食の用意が調っていて、後は食パンを焼くだけになっている。

「いめんごめん。先に食べていてくれたらよかつたのに」

「お父さんと一緒に食べたかつてん」

① いい子に育ってくれた。じわりと胸が熱くなる。

「お父さん、あたし、今度の日曜日、留美ちゃんのお誕生会に招ばれてるねん。行っていい？」

「ああ、いいよ。行っておいで」

「ファミリアのワンピースで行ってええかな」

「いや、あれは舞台用だ」

「でも、あれが一番綺麗で上等なんやろ？ みんなかわいって言うてると思うねん」

「でもなあ」

「あんなに綺麗な洋服があるのに一年に一回しか着いひんのは勿体ないやん。ね、お父さんお願い」

普段から聞き分けのいい子だった。義母にはすこし甘えたりするようだが、吾郎に対してお願い事などしたことはない。子供心に父親は仕事で忙しいのだから我が儘を言うてはいけない、と自制しているのがわかった。

春美のはじめてのお願いだ。叶えてやりたい。だが、これは美恵の遺産だ。生きている人間の願いはこれからいつでも叶えてやることもできるが、死んだ人間の願いはもうこれきりなのだ。破るわけにはいかない。「春美。よく聞いてくれ。お母さんは死ぬ前にこう言ったんだ。ファミリアのワンピースを着るのはピアノの発表会とコンクールのときだけにして、って。お父さんは約束した。その約束を破っちゃいけないんだ」

「でも、あれすごく綺麗やし」
 「春美。お母さんのお願いなんだ。お母さんは天国から見てる。お母さんを悲しませてはいけないよ」

きつぱりと言ひ聞かせる。しばらく春美は黙っていた。それから、うなずき、小さな声で言った。

「わかった」

美恵との約束を違えずに済んで、ほっとした。

次の日曜日が来た。朝から風の強い寒い一日だった。

春美は義母が買ってくれたお出かけ用のロングコートを着て誕生会に行った。吾郎は静かになった家でひたすら稟議書を書いた。

気がつくとは外は暗くなっていた。もう夕方だ。そろそろ春美も帰ってくる。洗濯物を取り入れ畳んでいると、ガチャリと玄関ドアが開いた。静かに閉まる。春美が帰ってきたのか。だが、^②ただいま、の声がない。

玄関を見に行くと春美が三和土に佇んでいた。

「春美、どうした。お友達とケンカでもしたのか？」

^③勢い込んで訊ねると、春美が首を横に大きく振った。そして、突然ぼろぼろと大粒の涙をこぼした。

「お父さん、ごめんなさい。ごめんなさい。チョコレート、こぼしてしもうてん」

「チョコレート？ 服を汚したのか？ なんだ、それくらいのことでは泣かなくていい」

それだけのことか。ほっとして思わず笑い出しそうになったが、春美は動かない。

「お父さん、ごめんなさい。ファミリアのワンピース、汚してしもうてん」

あのワンピースを着ていったのか？ まさか、と思つて春美のロングコートを見た。ボタンを首元まで留めているから中に着ている物はわからない。

「春美、コートを脱ぎなさい」

^④弾かれたようにびくりと震え、春美がコートを脱いだ。すると、黄色のワンピースのスカート部分の真ん中にはつきりとわかる茶色のしみがあった。

汚れたワンピースを見た瞬間、激しい怒りが突き上げ、思わず大きな声が出た。

「おまえは嘘をついて、お母さんとの約束を破ったんだ。お母さんは天国でどう思っているだろうな。お母さんを悲しませて平気なのか？」

「ごめんなさい、ごめんなさい」

「嘘をつくような子はもう信用できない。さつさと部屋へ行くんだ」

二階を指さした。春美は泣きながら階段を駆け上がった行つた。

のろのろと食堂に戻り、椅子に腰を下ろす。^⑤娘を怒鳴りつけた喉がまだひりひりと痛んでいた。男手一つで懸命に育ててきたつもりだ。なのに、娘に嘘をつかれた。惨めで悔しくてやりきれない。それに、自分は妻との最後の約束も守れなかった。申し訳なくてたまらない。

すまん、美恵。すまん——。隣のリビングに輝くグラランドピアノを見ながら何度も詫びた。

二階から時折泣き声が聞こえる。ふっと自分が幼かったときのことを思い出した。

——さつさと自分の部屋へ行け。

それは父から掛けられた、たった一つの言葉だった。そして、^⑥今、娘に同じことを言ったのだ。

俺はまだ尖った錐のままだ。閑古錐にはほど遠い。怒りにまかせて娘を突き刺した。

自己嫌悪と後悔にさいなまれながら頭を抱えていたが、思い切つて立ち上がった。階段を上つて声を掛けてから、春美の部屋のドアを開けた。春美はベッドの上で汚れたワンピースのまま泣いていた。

「春美。ワンピース、今からクリーニング屋さんを持つていこう」

はつとこちらを見る。それから、ぐしゃぐしゃの顔でまた詫びた。

「ごめんなさい、お父さん」

「嘘をついたことは春美が悪い。二度と人を騙しちゃいけない。でも、まずはその服を綺麗にしよう」

春美が真つ赤な眼でうなずき、それから（1）訊ねた。

「綺麗になる？」

「ああ。クリーニング屋さん洗濯のプロだから」

二人で駅前のクリーニング屋に行った。もう七十近いような店主が

（2）アイロンを使っている。眼を真つ赤に泣きはらした春美とワンピースを見て、こう言った。

「お嬢ちゃん、頑張つて綺麗にしたるからな」それから吾郎のほうに向き直つて言った。「とは言うても万が一の場合は了承願います」

二日後、ワンピースが仕上がった。しみは眼を凝らさないとわからないくらいに薄くなっていた。

「これだったら大丈夫だ。しみがあつたなんてわからない」

「ほんま？ ほんまにわかれへん？」

「ああ。舞台上が上がつたら観客席は遠いから絶対にわからない。ライトも当たつてるしな」

何度も言い聞かせると、春美の顔から（3）緊張が解けた。大きな息を吐いて、よかつたー、と笑い出す。

^⑦そうだ、これでよかつた。すこしだけ閑古錐に近づけたような気がした。

（遠田潤子『ミナミの春』より）

（注）ファミリア：服のブランド名。

稟議書：仕事上の書類。

閑古錐：年月の経過で先が丸くなった錐。亡き妻が教えてくれた言葉で、ここでは吾郎が目指しているおだやかな生き方を指す。

問一 空欄（1）（3）に入る適当な言葉を次のア～キから選び、それぞれ記号で答えよ。

ア しだいに イ 黙々と ウ ほつと エ ようやく
 オ しみじみと カ すこすこ キ おずおずと

問二 傍線部①「いい子に育ってくれた」とあるが、いっしょに朝食を準備して待つだけでなく、ほかにどのような点で春美は「いい子」だと吾郎は思っているのか。本文中より四十字以内で抜き出し、その最初と最後の五字を答えよ。

問三 傍線部②「ただいま、の声がない」とあるが、春美が「ただいま」と言わず玄関の三和土に佇んでいたのはなぜか。次のア～エから適当でないものを選び、記号で答えよ。

ア 亡くなった母が買ってくれた大切なワンピースを、父の言いつけも守らず結果的には汚したことに罪悪感を覚えているから。

イ 父親にできていけないようにと強く言われていたワンピースを、実は着ていったと知られ、怒られるのだと思うと怖かったから。

ウ 父親にできていけないようにと強く言われたことに反発し、反抗心から着ていってしみを作ってしまったことを後悔しているから。

エ 父親にできていけないように言われたワンピースをこっそり着ていき、汚してしまったことを本当に申し訳ないと思っているから。

問四 傍線部③「勢い込んで訊ねると」とあるが、「勢い込んで」とはどういうことか。次のア～エから最も適当なものを選び、記号で答えよ。

ア 何かあったのかと心配するあまり意気こんで

イ 誕生会で嫌なことがあったのだと決めつけて

ウ 春美を傷つけるなんて許せないと怒り狂って

エ 春美の気持ちを落ち着けようとやっきになって

問五 傍線部④「弾かれたようにびくりと震え」とあるが、春美がこのように「震え」たのはなぜか。説明せよ。

問六 傍線部⑤「娘を怒鳴りつけた喉がまだひりひりと痛んでいた」とあるが、このときの吾郎の気持ちを、解答欄に合うように二十字以内で説明せよ。

問七 傍線部⑥「今、娘に同じことを言ったのだ」とあるが、どういうことか。説明せよ。

問八 傍線部⑦「そうだ、これでよかった」とあるが、何が「よかった」のか。次のア～エから最も適当なものを選び、記号で答えよ。

ア ワンピースのしみが目立たなくなったことと、春美に善悪の区別をつけるように教えられたこと。

イ ワンピースには少ししみが残ったが、春美がそのことで悩みすぎないようにすることができたこと。

ウ ワンピースをクリーニング屋に出すという的確な判断ができたことと、春美が笑顔になったこと。

エ ワンピースがほぼ元通りになったことと、春美の気持ちを思いやり、安心させることができたこと。

④ 次の文章は豊者で写真家である筆者によって書かれた文章である。よく読んで後の問いに答えよ。

小学校に入学するまで通っていた発音訓練の教室では、毎日絵日記を書く宿題がありました。夜遅くまで眠い目をこすりながら書いた日記は、指導員によって言葉の間違いを指摘されるだけで、内容に触れられることはありませんでした。

本来ならば、^①言葉の力を伸ばすためであれ、日記に綴られた言葉は、会話を交えるきっかけであるべきです。ぼくが覚えていないだけで、もしかしたらそうした会話がこなわれていたのかもしれない。しかし、当時は、手話を禁じられ、補聴器で拾うあいまいな音に集中する日々でした。周囲の大人たちから求められたのは、発音と、文章の正しさばかり。

り。言葉を交わす喜びを感じる余裕はありませんでした。

加えて、毎日書いていた絵日記は二〇〇文字にも満たない短い文章で、幼心に「これが自分の伝えたかったことではない」と感じていました。それでも、文章にはマルバツをつけられ、音読も間違いを正されるばかりで、内容には触れられない。そうして他者から否定されながら重ねられたやりとりが、ぼくの言葉から「思いを伝える力」を奪い、言葉は「^②正しさを測るだけの記号」として押しつけられるようになりました。

言葉を出せば出すほどに、^③自分がわからなくなっていく感覚。それは今、言葉の ^a タイカイトとも言える SNS で繰り返されるやりとりと、どこか重なるものがあるように感じます。

SNS のユーザーは、ネットに「言葉」を次々と投げ込みますが、その多くは数値化された「いいね数」や「フォロワー数」に ^b シェアヤクされたり、「シェア」や「リポスト」によって拡散されたりします。情報としての価値ばかりが求められ、「自分の言葉」に含まれている ^④ 「ことば」から遠ざかっていくことが多いように思います。

SNS で多くの人に届く、いわゆる「バズる」投稿には過度に注目度を追求したものが多く一方で、発言者自身の血肉がこもった、極めて私的な「言葉」も少なからず存在します。

それはおそらく、その「言葉」をつむぐまでに積み重ねられてきた「ことば」が、その思いをしつかりと支えているからではないでしょうか。他者の評価を抜きにして、発した人の生きてきた時間や経験が積み重なった「ことば」の重みを宿した「言葉」は、たとえ私的で小さなものであっても、不思議と多くの人の心に響いていくものです。

こうした「ことば」を大切に育み、その存在を信じたうえで、自分の言葉をつむいでいくためには、自分の中に刻まれた原風景が何よりも大切だと思っています。

原風景とは、幼いころに感じた景色や感覚が心の奥底に静かに息づいている、自分の心が帰る場所のようなものです。特定の景色や場所だけを指しているわけではありません。春の光、風の匂い、耳に残る響き……そんな細かな感覚たちが重なり合って原風景を形作っています。

日常の中で、ふとしたことがきっかけとなって原風景の記憶が顔を出すことがあります。

夕焼けに ^c ソまる空を見上げたとき、水をまいたアスファルトから立ち上る匂い、草むらを揺らす風、焚き火の匂い、雨上がりの夜の匂い、好きな食べ物の味……。

そこには、まだ形になりきれしていない思いや感じ方、「ことば」が満ちています。「ことば」が「ことば」であることを許されなまま、^⑤「言葉」を押しつけられるとき、ことばの原風景から芽吹こうとする「言葉」の芽を摘んでしまう恐れがあります。

だからこそ、言葉に対して、判定を下したり、^d セイゴウ性を求めたり、マルやバツをつけることに、今一度、慎重になつてほしいと願います。一方的に評価するよりも、「言葉」の背後にある「ことば」の原風景に目を配ることで、内面世界を育んでいくことができるのだと思います。「言葉」は「ことば」に支えられている——その構造をイメージするだけでも、他者の言葉に対する接し方のおおずと変わってくるのではないのでしょうか。

ぼくは、この「言葉はことばに支えられている」という構造がイメージできたとき、自分の「言葉の解像度」が、より上がったと感じています。

これまで何度も語ってきたように、ぼくの「言葉の解像度」を上げてくれたのは、やはり手話と写真でした。

デジタルカメラで撮影された写真は、小さな点の集まりでできています。この点のことを「ピクセル」といいます。小さなピクセルはそれぞれに、色と明るさの情報を持っています。

たくさんのピクセルが集まることで、一つの画像が形作られて一枚の写真ができます。写真の解像度は、このピクセルの数に比例します。

たとえば、iPhone 15で撮る写真は四八〇〇万画素です。一枚の写真に8,000,000ものピクセルが集まっているわけです。ちなみにぼくが写真始めた二〇〇〇年は三〇〇万画素で大騒ぎしていました。そのことを思うと、^⑥「隔世の感」があります。「解像度」という言葉は、もともと写真や映像の分野で使われる用語で、細部をどれだけ鮮明に捉えられるかを示すものです。たとえば、画像の表示内容がより細かくなることを「解像度が上がる」と言います。解像度が上がるとこれまで見えなかった細部が、はつきりと見えるようになるのです。

写真を拡大していくと、砂のように無数のピクセルが集まっているのがわかります。ピクセル自体は小さいものの、一つひとつがそれぞれに色を有しています。肉眼では見ることも認識もできないほどに小さなピクセルが無数に存在することで、一枚の写真を構築しています。

この構造は、「言葉」にも当てはまると思っています。

一つの「言葉」を支えるのは、それまでの人生で見聞きし、感じ、考え、想ってきた、無数の「ことば」です。

写真の解像度が上がることで新たに覚えてくる風景があるのと同じように、^⑦「言葉の解像度」が上がることで、自らの実感から生まれた「ことば」の気配と向き合うことができます。そうすることで、表現はより深まり、自分の気持ちや、見てきた事柄を様々に言い表せるようになります。

「寒い」という一言も、ぼくの前風景を元にする、「肌を刺す寒さ」(一月の青森県の夕暮れの八甲田山)、「しんと冷える夜」(二月の深夜の東京都)、「夏の余韻が残る、やわらかな冷氣」(一〇月の岩手県遠野市のよく晴れた日)、「雪混じりの風は氷の刃となり、空気さえも凍りついた白い闇につつまれる」(一二月の北海道、宗谷岬の暴風雪)といったように、多様な表現で違いを描写できます。

自分自身の実感から得た「ことば」を見つめて掘り下げていくことは、「言葉の解像度」を上げていくことに他なりません。そうすることで誰かの表現の借り物ではない、明瞭で具体的な自分自身の「言葉」が芽吹くのです。

ぼく自身も、「言葉の解像度」という構造に気づいたことで、マルバツの日記、つまり^⑧他者の評価を絶対視する呪縛から解放されました。自分の経験や感覚、思いに根ざした「ことば」による、自然な「言葉」を綴れるようになりました。

(齋藤陽道『つながりのことば学』より)

問一 二重傍線部 a～d のカタカナを漢字に直せ。

- a タイカイ b シュウヤク c ソ(まる) d セイゴウ

問二 傍線部①「言葉の力」とあるが、これはどのような力を指すか。

その説明として最も適当なものを次のア～エから一つ選び、記号で答えよ。

- ア 読み手の気持ちに配慮しながら文章を書く力
イ 自らの思いを正確に伝えられる文章を書く力
ウ 読み手の興味関心をひく面白い文章を書く力
エ 正しい文法や言葉遣いを用いて文章を書く力

問三 傍線部②「正しさを測るだけの記号」とあるが、これはどのようなことか。次の空欄 A・B をそれぞれ指定の字数で埋めて説明せよ。

言葉とは本来 A (一〇字以内) ものであるはずなのに、このときの筆者にとつては B (五字以内) を得る手段であったということ。

問四 傍線部③「自分がわからなくなっていく感覚」とあるが、筆者がこのように感じたのはなぜか。その理由を次の空欄 C・D をそれぞれ自分の言葉で埋めて説明せよ。

C を大切にせずに D を優先してしまったから。

問五 傍線部④『「ことば」とはどのようなものだ』と筆者は考えているか。本文中から二十字以内で抜き出して答えよ。

問六 傍線部⑤『「言葉」を押しつけられるとき』とはどのようなときか、説明せよ。

問七 傍線部⑥「^{かくせい}隔世の感」の意味として最も適当なものを次のア～エから一つ選び、記号で答えよ。

- ア 目覚ましい技術の進歩に対する驚き。
イ 自分が周りから疎外されているという感覚。
ウ 世の中がすっかり変わってしまったという印象。
エ 昔は最先端だったものが今では価値がなくなった寂しさ。

問八 傍線部⑦『「言葉の解像度」が上がる』とはどういうことか。それを説明したものととして最も適当なものを次のア～エから一つ選び、記号で答えよ。

- ア 言葉の背景にある経験や考えを意識することで、その言葉の認識が深まり表現に広がりが生まれるということ。
イ 言葉の意味を詳しく調べることによって、その言葉についてより多角的に捉えることができるということ。
ウ 言葉を自分の中で映像化して捉えることで、より鮮明にその言葉の意味を想像することができるということ。
エ 言葉に込められた意味を考えることで、その場地的確な表現を選んで言語化できるようになるということ。

問九 傍線部⑧「他者の評価を絶対視する呪縛から解放されました」とあるが、なぜそのような感じられるようになったのか。次の空欄 E・F をそれぞれ自分の言葉で埋めて説明せよ。

言葉は E ものだと気付いたことによって、F 必要はないと分かったから。

※ 問題はこれで終わりである。

*印の欄には記入しないこと。

受験番号

☐ 解答は解答用紙(全2の1)に書きなさい。

☐

問一

(1)

(2)

(3)

(4)

*☐

*

*

問二

①

②

③

④

問三

①

②

③

☐

問一

(1)

(2)

(3)

*☐

問二

①

②

③

④

問三

①

②

③

④

問五

から。

問六

気持ち。

問七

とらう(う)と。

問八

☐

問一

a

b

c

まる

d

*☐

問三

A

B

D

C

*☐

問四

C

D

D

C

問五

問六

とき。

問七

問八

問九

E

F

F